

平成28年度 静岡県身体拘束廃止推進員研修 実践報告

## 『スピーチロックへの意識改革』

グループホーム 汽笛 報告者 大石健人

### 施設概要

- 株式会社川根力 グループホーム 汽笛
- 所在地 静岡県島田市川根町家山 382-1
- 開設日 平成26年6月1日
- 定員 18名
- 居室概要 2ユニット 18床
- 職員配置の実際 施設長1名 ケアマネージャー1名  
介護職員20名
- 併設施設 なし
- 静岡県身体拘束ゼロ宣言 平成26年9月22日

### I はじめに

「身体拘束廃止を進めるための18のチェックポイント」を使用し、職員にアンケートを実施した後、全体会議で聞き取りなどを行った。項目ごとに差は見られたが、『「身体拘束とは何か」が明確になっており職員全員がそれを言えるか』について殆どの職員が低評価としていた。この結果は施設が開設されてからようやく3年目になるということもあり、各職員の経験も浅く、身体拘束について具体的に考えたり取り組んだりしていなかったためと思われる。またその中でもスピーチロックという言葉聞いた事がなく、普段何気なく利用者と接している際に使っている言葉も拘束に該当する、ということに初めて気付いたという職員も多数見られた。これらを踏まえて、まずはスピーチロックに焦点を絞って意識改革をしていき、身体拘束について各自が答えられるという目標を立てる事とした。

### II 取り組みの実際

10月3日の全体会議において、スピーチロックの中で問題点を細かく分類して改善していこう、という事になった。具体的には①呼び捨て・子ども扱い②相手の声を無視する③後ろから声をかける④大声で呼びかける、の4項目とした。

またこれらに取り組んでいくに当たり、拘束廃止委員会を立ち上げることとした。他委員会との兼ね合わせも考慮し、施設長やケアマネに協力を仰ぎ自分が委員長となり発足させた。

各項目について、①は特定の利用者と職員という案件だったため、該当職員に対して直接

注意を促し、職員連絡用のホワイトボードに「ちゃん付け禁止！」などの目に見える注意喚起を行った。②についてはずっと同じ質問や要求を繰り返してくる利用者に対して、対応が粗雑になっていく傾向が見られた。これに対しては職員が交代して対応する、また要求に応えられない時にもその理由を説明する、といった基本ができるよう職員同士での注意や助け合いが必要という共通認識を持ってもらうこととした。③④についても基本的なことであるが出来ていない時もあった。そのため意識が高められるよう、ポスターを作製し掲示した。内容については利用者やご家族が見ても不快にならないよう意識して作成した。

### Ⅲ 成果と課題

- ① について、本人は勿論周囲やご家族が聞いて不快にならない、ということが前提になるが、「ちゃん付け」をやめると本人が少し寂しがっていた、ということもあった。この辺りは本人やご家族への事前の聞き取り不足もあった。また職員も気を付けていても会話が弾むと無意識に言葉が出てしまっている事があり、意識付けをもっとしていかなければ浸透しないと思われる。
- ② について、認知症を患っている方々という事を理解していても、忙しかったりあまりにも問題行動が続くとイライラが募りきつく返してしまう、といった対応になってしまうことが見受けられた。やはり職員同士での注意、助け合いがまだまだ出来ていないと感じられた。
- ③ について、認知症を患っている方々にはしてはいけないことだと理解していても、後ろから追いかけて行ってそのまま声を掛ける、などを作業のながれの中で無意識にしている職員がまだ多い。意識の徹底が必要と思われる。
- ④ について、③でも言える事だが遠くで立ち上がった利用者、近付かずにその場で大声で呼びかけたりする姿がまだ見られる。周囲への影響もあるため、もっと徹底して改善していかなければならない。

### Ⅳ 身体拘束廃止取り組み体験から得たもの、感じたこと

今回はスピーチロックに焦点を絞り、細かい目標を設定して取り組んできたが、自身を含め、施設や職員の経験不足が出ていると感じた。職員が目の中の仕事や利用者、手いっぱいとなってしまっており、周囲のフォローや利用者へ目が行き届いていないことがあるのが現実である。また「ちょっと待って」などどうしても代わりになる言葉が見つからず、苦勞する場面も見受けられた。

それでも、取り組むことによって各自スピーチロックに対する意識は少しずつ浸透しているようで、言葉遣いの改善や職員同士の注意なども見受けられるようになった。また利用

者の要求に対して優先順位をしっかりと見極め、対処することで周囲の雰囲気も良くなっていったと思われる。

これからの課題として、

- ① 理解していると思われるフィジカルロック・ドラッグロックについて再度認識を改め意識していくこと
- ② ポスターを定期的に更新していくこと（※当初は2ヶ月に1回更新していく予定であったが、まだ次の案が出来ていない）
- ③ 活動が不定期になっている拘束廃止委員会を毎月開催する
- ④ 各利用者に対しての問題点を挙げていき各フロアで取り組んでみる

などが考えられる。また利用者に対する情報をもっと細かく集めて（敬称など）心身ともに距離の近いケアができるよう心掛けていくことが必要と思う。

今回の研修を通して施設で職員の意識を高め、実践していったことは大変貴重なことであるが、大事なのはこれをずっと継続していくことであり、「身体拘束のない施設」として地域の皆さまに認識して頂けるよう、これからも職員や地域と連携して努力していく所存である。